

を保つ者とこれに追随するものとの間が、固定化する傾向があるので、生徒の実態に応じて、教材ごとにグループを編成し直すなどの配慮が大切です。

(2) 等質小集団

学級内で習熟度別にグループを編成して、それぞれに適した学習を行わせようとするものだが、等質なので教師が指導しやすく、知識習得の効率をあげることができます。しかし、同一学級内での小集団編成であるので、劣等感等の心理面への配慮が必要で、特に習熟度の低い生徒に対しては「わかる」ことによって充実感、成就感が得られるように教材を工夫することが大切です。

3 習熟度別学級

習熟度の差の比較的大きい教科（英語・数学等）に対して、よく編成される学習集団です。この場合は、ホームルームはそのまま、教科の場合だけ他の学級で学習することになるので、次の固定学級に比べて、比較的安定した状態での学習活動が期待できます。また、かなり等質になることから、習熟度に応じた教材での学習がなされるので、「わかる」ことによって学習意欲を喚起させることができます。この場合、ホームルーム学級より、科目別学級の数を増やせば、学級の人数も減り、学習の個別化を図ることもできるでしょう。

この編成を行うときの留意点は次のとおりです。

- (1) 学級編成をする際に、習熟度をどうとらえるかを、教材構造の分析とともに十分検討する必要があります。
- (2) 習熟度の低い学級は、学習速度を自然学級よりゆっくりさせるので、学習しやすくなります。しかし、習熟度が低いのに高い学級を希望した生徒や、習熟度が低い学級との境界域にある生徒が、習熟度の高い学級に入った場合、学習内容が高度なため、学習意欲を失う傾向がみられますので、これらの生徒に対しては個別指導を強化するなどして、習熟度の高い学級への適応を図ることが大切です。
- (3) 教室移動がたび重なると、校内での生徒の動向が掌握しにくくなります